

東急王国に行く その3

大井町線の旅

昭和2年(1927年)、目黒蒲田電鉄が大井町・大岡山間で開業したのが始まりで、昭和4年(1929年)に大井町・二子玉川間が全通した。昭和38年(1963年)に田園都市線と改称したが、昭和54年(1979年)に再び、大井町線に改称した。

昭和40年代~50年代には長津田方面へ行くのには、京浜東北線で大井町へ行き、田園都市線に乗り換えることが多かった。「田園都市線」という、漢字表記ながらどこかバター臭い路線名があまり好きではなかったが、大井町駅を出ると車窓に広がる景色に「人々の暮らし」や「下町の空気」が感じられて、下神明・中延・荏原町と進むにつれてその空気が消えていくのが面白かった。

それから60年余、再び大井町駅からじっくりと景色を眺めて、空気を感じてみることにした。

いつものように10時23分発のバスで八千代台駅へ、そして日暮里で乗り換えて大井町へ。

初めて大井町駅に降りたのは高校生の頃だったように記憶している。東急電鉄の拠点なのに阪急デパートがあったり、国鉄大井町駅に直角に突っ込んでくる東急大井町線、駅前を歩くと「下町」のような、「下駄ばき」の空気を感じさせる町、大井町は驚きの街だった。

●大井町 駅近くの蕎麦屋で軽い昼食を済ませて「大井銀座」と名がつく商店街をぶらついてみたら、あの頃と同じようににぎわっていた。強い日差しと27℃を越えたと思われる暑さ。奈良時代から平安時代にかけて、この地に東海道の「大井の駅家(えきか・うまや)」が置かれた。大井と言う地名はこの時代にはすでに存在していた。大井山光福寺にある井戸・湧水が、「大井」という地名の起源だと言う。この寺は延暦元年(782年)の開山時には天台宗の薬王院神宮寺だったが、鎌倉時代に浄土真宗の僧了海により中興されて、大井山光福寺と改称した。建仁元年(1201年)に了海が生まれた時に、この井戸の水を産湯として使ったと言われている。大井山光福寺はここにある。 <https://yahoo.jp/8opWckr>

●下神明 西に向かってわずかな距離で最初の駅「下神明」に着く。西側を新幹線・湘南新宿ライン・横須賀線が走り、そこに道路も加わって、駅の周辺は複雑な凹凸になっている。昭和2年(1927年)の大井町線開通時の駅名は「戸越」だったが、昭和11年(1936年)に「下神明」に改称した。元はこの辺りは蛇窪村と言っていたが、正保年間(1644年)に上蛇窪村と下蛇窪村に分かれた。それぞれの村に氏神として神明社(天祖神社)があったことから、昭和7年に東京市に編入される時に、上蛇窪村は上神明町という町名になり、下蛇窪村は下神明町という町名になった。南北朝時代が終わった1400年代初頭に、関東各地ではいくつかの動乱が起きていた。常陸の鹿島神社では、大井の鹿島神社の警護が必要と感じて、平将門の乱を鎮圧した藤原秀郷の末裔である伊藤何某に対応を命じた。伊藤一族は自領の東側の高台にあらたに天児屋根命(あめのこやねのみこと)を祀る祠(春日社)を建てた。江戸時代に入り、伊勢神宮信仰が広がって



きたことを機に、天照大御神を勧請して、神明社の位置づけも確保した。

明治に入って、「神明社は天祖神社に統一せよ」との東京府からの命を受けて、名を改めた。駅から路地をくねって南へ徒歩10分ほど歩くと、下神明天祖神社の鳥居と石柱が現れた。住宅地の中にあるが、細長い参道を進むといささか緊張感が盛り上がってくる。

下神明天祖神社はこちら <https://yahoo.jp/Ex6we2>

ついでに天祖神社の南側にある天台宗東光寺にも立ち寄ってみた。天文13年(1534年)創建の寺で、比叡山延暦寺の末寺で正式名称は久遠山不動院東光寺。「東司(便所)守護烏枢沙摩明王(うすさまみょうおう)」と書いた石柱が祀ってあった。不浄を焼き尽くして清浄に転じる佛として崇められており、厠の守護として堂が建っていた。

●戸越公園 昭和2年(1927年)の開通時の駅名は「蛇窪」だったが、昭和11年(1936年)に「戸越公園」に改称した。低湿地の窪地で蛇が好んで棲みつく土地で、この名が付いたと言われている。「蛇窪」の方がこの地の成り立ちが解って良いと思うが…。

江戸時代の初期には、肥後熊本藩の細川家の下屋敷があり、屋敷や回遊式庭園などが整っていた。のちに松江藩・出羽上山藩などの松平家の手に渡り、明治維新後は何人かの人を経て三井家の持物になった。昭和7年(1932年)に三井家から荏原町に庭園の部分が寄付されて、昭和10年(1935年)に戸越公園としてスタートし、駅名も改称になった。

戸越公園駅を出ると、電車は左にカーブして南西に向かうようになる。

●中延 駅の南東に上神明天祖神社(通称:蛇窪神社)がある。文永8年(1271年)に北条重時の五男時千代が仏門に入って大森に巖正寺を建てた時に、家臣たちは蛇窪村に住みついた。元亨2年(1322年)に巖正寺の池の竜神に雨乞いをしたところ慈雨に恵まれたことから、霊験に感激した家臣たちが神明社を建てて祀ったのが始まりとされている。

のちに村社に昇格した際に天祖神社と改名した。

鎌倉時代に、境内に湧水を利用した洗い場があり、白い蛇が棲みついていて、ある日、水が枯れて洗い場がなくなると、白蛇も姿を消してしまった。地元の豪農の森谷氏の夢枕に白蛇が現れて、「元の場所に帰りたい」と懇願したので、宮司と相談して、新たな池を掘って弁才天を祀った。弁才天が完成して祈禱をしていると、一天にわかにかき曇り雷鳴が轟いた。

という伝説もあり、現在では「蛇窪神社」を通称としている。

蛇窪神社という呼称ゆえか参拝客が多く、にぎわっていたが、様々な参拝ビジネスも繰り広げられているようだった。神社の一角には、上神明小学校があり、豆腐屋・米屋・銭湯など商店が並び、神社を中心とした賑わいがあったことが想像できる。

上神明天祖神社(蛇窪神社)はこちら、 <https://yahoo.jp/j5HZUm>



●荏原町 駅の北側の緩やかな傾斜を上って行くと、数分の所に八幡山法蓮寺があり、その北側に旗岡八幡神社がある。旗岡八幡神社は長元3年(1030年)に平忠常の乱を鎮圧すべく下総に向かった源頼信が、この地に宿営した時に、八幡大神を祀って戦勝を祈願した。高台に陣を張って白旗を建てたことから、この丘が「旗の台」と呼ばれるようになった。次の駅「旗

の台」の地名の起源につながる神社である。

日蓮宗八幡山法蓮寺は、池上本門寺の末寺で、文永年間(1260年代)に、この地の領主で八幡太郎義家の子孫である荏原左衛門尉義宗(源義宗)が開山した。本堂改修工事中で残念ながら拝観はできなかった。

大井町線には荏原町・中延があり、池上線には荏原中延と似たような駅名が並んでおり、都営地下鉄には荏原町・戸越、池上線には戸越銀座もある。こればかりではない、目黒線には洗足、池上線には洗足池、大井町線には北千束もある。よそ者にはちよいと難しい。

●旗の台 池上線との乗り換え可能な駅で、大井町線が池上線を跨ぐ構造なので、車窓からの見晴らしも良い。地名の由来は荏原町の項に記したので省略。

旗の台駅を出ると、少しずつ北西に向かうようになる。

●北千束 大田区北千束という町の南端に位置し、駅を南側に出ると、すぐに南千束2丁目。旗の台・大岡山など台地を示す地名が並び、南面が緩い下り坂で、その先に洗足池がある。昭和3年(1928年)の開業時の駅名は「池月」だった。源頼朝が洗足池の畔で野営した時に池に映る月のごとき美しさの野馬と出会い、のちにこれを愛馬とし、「池月」と名付けたという言い伝えからできた地名(駅名)だが、昭和5年(1930年)に「洗足公園」に改称し、さらに昭和11年(1936年)に「北千束」となった。洗足池へ行くなら、池上線で洗足池駅が便利。

●大岡山 目黒線との乗換駅。大井町線は、駅の手前から地下に入ってしまう、周囲の景色は見られないのが残念。(前篇「東急王国に行く その2」で触れたので、ここでは省略)

●緑が丘 昭和4年(1929年)開業時の駅名は「中丸山」。昭和8年(1933年)に緑ヶ丘に改称し、昭和41年(1966年)に緑が丘に改称した。駅の北側にある旧東京工業大学のキャンパスのはずれにある小さな丘を「中丸山」と呼んでいたことが、当初の駅名の由来。当時のこのあたりの地名は「荏原郡碑衾(ひぶすま)町字谷畑(やばたけ)下」だったが、東京市に編入するにあたり、「緑が多い丘陵地」ということから、緑が丘と名付けられた。

●自由が丘 北西に向かっていた電車が南西に進路を変えると自由が丘駅に入る。昭和2年(1927年)の開業時の駅名は「九品仏(くほんぶつ)」だったが、昭和4年(1929年)に自由が丘と改称した。この町も元は「荏原郡碑衾(ひぶすま)町大字衾」だった。昭和4年(1929年)に九品仏浄真寺の前に「九品仏」という駅ができることになり、駅名を「衾」と改称する動きが始まったが、この土地を拓いてきた主要人物(自由が丘学園創始者など)の反対にあって、結局「自由が丘」という駅名になった。

●九品仏 前述のように、昭和4年(1929年)に開設した九品仏浄真寺の門前駅。中学生の頃には、この駅を「くほんぶつ」と読めなかった。駅を出て北側に進むと、一直線の参道が導いてくれる。(右画像:浄真寺 web の案内図) 寺の正式名称は浄土宗九品山唯在念佛院浄真寺。世田谷吉良氏の系列の奥沢城があったが、廃城になった



後で寛文5年(1675年)に、この地の名主七左衛門が寺地としてもらい受け、僧珂碩が延宝6年(1678年)に浄真寺を開山した。上品堂・中品堂・下品堂の三つの阿弥陀堂それぞれに、三つの印相の阿弥陀如来像を安置していることから九品仏と呼ばれるようになった。

●尾山台 昭和5年(1930年)開業の駅。この地は、江戸時代には荏原郡小山村だったが、のちに武蔵小山と間違いやすいので「小山」を「尾山」に変えた。国分寺崖線と言われる海拔30m台の舌状台地の先端で、多摩川左岸(海拔10m)にすんと落ちている。台地上には古墳を始めとして遺跡が数多く発見された。

●等々力 昭和4年(1929年)に開業した駅。「谷沢川の水の流れの轟き」が地名の由来と言われているが、他にもいくつかの説があり、どれが真説かははっきりしないらしい。谷沢川が多摩川に合流する直前に、台地をえぐった溪谷があり、等々力溪谷と言われてきた。中学生か高校生の頃に見に行ってみたが、「溪谷」というほどの大きさではなかった。緑が失せ始めていた東京では異質な存在だったように記憶している。等々力駅を出た電車は、しばらく谷沢川と並走した後で川を渡って上野毛駅に向かう。

●上野毛 昭和4年(1929年)に開業した駅。江戸時代には上野毛郷と言われていたが、明治時代に玉川村の一部となった。多摩川を挟んで対岸の川崎市高津区に下野毛という地名があるが、多摩川の氾濫・流路の変化により野毛という里が分離してしまったと考えられる。「のけ」は台地の末端の崖地を意味する古語で、これが地名の起源ではないかと言われており、「のけ」の上が上野毛で、「のけ」の下が「下野毛」と考えると合点が行く。

●二子玉川 大井町線は、五島美術館の北側を抜けると左に大きくカーブして、二子玉川駅で、渋谷から来る田園都市線と合流する。今や「にこたま」で充分通用するようになり、二子玉川と言ってくれる人は少なくなった。二子玉川と言う駅名はあるが、地名としては存在しない。多摩川を挟んで東側に「玉川村」があり、西側に「二子村」があり、ふたつを結ぶ「二子の渡し」があった。「二子の渡し」は、大山詣の客が多摩川を渡る場所として賑わい、宿や遊郭もあったらしい。今は、商業施設が林立する大きな街となり、さらに上回る賑わいの街となっている。大井町線はここが終点だが、電車は田園都市線に乗り入れていて溝の口まで行くので、ここから南西に向かい、多摩川を渡って神奈川県に入って行く。



我が旅「東急王国に行く」は、これが最終篇。大井町線沿線の魅力を探ね歩き、ここを終着駅とする。想像以上に面白い情報が満載の街だった。

以上

*参照資料 東京の地名由来辞典 竹内誠著 東京堂出版 ほか

*関連資料

東急王国に行く その1 <http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/tokyu1.pdf>

東急王国に行く その2 <http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/tokyu2.pdf>